

2022 年 6 月 30 日

実践女子大学・実践女子大学短期大学部
教員研修 実施報告書（Web 公開用）

1. 所属	文学部 英文学科
2. 職名・氏名	教授 深瀬有希子
3. 研修期間	2021 年 4 月 1 日 ～ 2022 年 3 月 31 日
4. 研修先機関（国名）	慶應義塾大学法学部
5. 研修課題名	A・ロックの「ニュー・ニグロ」概念の変遷
6. 研修経過 （月単位で記載してください） 例）4月上旬～5月下旬：	前半（4月から9月）：共著『ハーレム・ルネサンス―〈ニュー・ニグロ〉の文化社会批評』の代表編集者として、本書の完成に従事した。本書の共著者でもある研究先機関の奥田暁代先生、常山菜穂子先生、大和田俊之先生、有光道生先生から 1920 年代のアフリカ系アメリカ文学文化についての最新の批評動向や本書の構成についてのアドバイスを頂戴した。 後半（10月から3月）：紙幅の関係で上記研究書に含むことができなかったテーマー1920 年代ニューヨーク公共図書館ハーレム分館を教育および抵抗の場として考える―を、文学および映画批評論として発表。さらに、美術収集家アルバート・バーンズと、歴史ある黒人大学として知られるペンシルヴェニア州リンカーン大学学長ホレース・ボンドとの関係について、アーカイヴ調査を行い、1920 年代半ばに議論された〈ニュー・ニグロ〉の美学が 1950 年代にまで継続し、アフリカン・アメリカンの美術教育、さらにはのちの公民権運動の展開の思想的基盤となったのではないかと考察した。
7. 本研修で得られた成果等（論文・学会発表含む）	共著：深瀬有希子・常山菜穂子・中垣恒太郎編集、松本昇監修 『ハーレム・ルネサンス―〈ニュー・ニグロ〉の文化社会批評』（明石書店、2021 年）（2021 年度科学研究費補助金・研究成果公開促進費（学術図書・課題番号 21HP5035）、「序―「ハーレム・ルネサンス」批評の現在」 pp. 19-25, 「第 26 章 ブラック・モダニストの生―トニ・モリスンの『ジャズ』にみるニュー・ニグロの読者たち」 pp. 544-566, 「主要参考文献」 pp. 577-574 論文：「民主主義の柱、アクティヴィズムの現場―『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』への小説的アプローチ」『ユリイカ特集フレデリック・ワイズマン』（2021 年 12 月） pp. 184-192 学会発表： 黒人研究学会 4 月例会（2021 年 4 月 24 日）「禁じられたクラブへの招待状―モリスンの「黒人」大統領発言を再読する」

8. 所感	研究先機関の複数の先生方のご論考を、責任編集者として共著としてまとめる仕事に従事できたのは光栄であった。内容だけでなく、一冊の学術書を完成させるプロセスについても、明石書店編集部の方々のご教示のおかげもあり、大いに学ぶことができた。本書で示したように、1920 年代のアフリカ系アメリカ人芸術家によって生み出された文学文化作品の数は膨大であるため、それらのすべてを個々に追求していくという作業については依然としてすべきことは残っているが、上記の成果をもって、いちど区切りをつけたい。そしてそれを踏まえて、研修期間の後半で整理した問題—1950 年代への思想的かつ社会的影響についての考察を今後は深めていきたいと思う。その具体的な計画として、本年 2022 年夏に、ペンシルヴェニア州フィラデルフィアにあるバーンズ・コレクションにて、バーンズとロックについての映像展示が公開されるので、それを調査する。そしてその成果を、2022 年秋から冬の講演会で発表する予定である。
-------	---